

「ちょっと離れて歩いて」

村長の家を出た直後のことだった。少女は不機嫌そうにそう言った。

明るい未来に向けて闊歩かつぽしていた長身の男だが、百歩ひゃつぽも歩かないうちに、辛辣な口撃を浴びせられ、あえなく撃沈した。

小さな銀縁眼鏡の奥にある“白哲はくせきの美丈夫”と呼んで差し支えない顔立ちを、悲しくなる程激しく歪め、いつの間にか取り出していた手拭ハンカチいを口端に咥くはえて歯噛みする。

「嗚呼、ギラギラとした夏の日差しが憎らしい……この長閑のどかなはずの田園風景でさえ、今の私にはまるで虚無のよう……」

舞台でもないのに無意味に演技力を見せ、リデルの悲哀を誘った。当然の事ながら、演技に悲しみを覚えるのではなく、その人間性を哀れんでいることに間違いなのだが。

「そんな変な顔しないで…… これでもアンタの為に言っただけだから。……私の事は店でなんか聞いたでしょ？ “嘘付き”とか、“疫病神”とか、そんな感じの」

どうやら不機嫌な理由とは別の話のようだが、アランは首を傾かしげた。

少女を信用していないのではなく、自分の言動に思い当たる節があり過ぎて、“誰たがために”と言われたところで、素直に頷けるものではない。

——アランは眉間に人差し指を押し付け、しばし過去を遡る。

すぐにピンと来た節があった。食事処にいた、あの小太りな中年男性の言葉だ。

「ああ、悪いモノが憑く」とか何とか言っていたような……」

鮮明に思い出されたことを、アランはそのままの大ききで口にした。ところが同時に隣りを歩く少女の目が細められる様を見るなり、

「——言っただけでなかったような、それでいて全くもって違うような……」

ゴニョゴニョと曖昧な表現で言葉を濁した。

あくまでも彼なりではあるが、咄嗟つとの回避策フオロにリデルは苦笑いを浮かべた。まさか、こんな唐変木に氣遣きぢわれるとは。

「自分が……他人ひとから呪われる、なんて思ったらさ……結構、怖いよね」

そう言いながら頭に巻いた布の端を、指先で弄り出した。色々と考え事をする時の、少女の癖だった。

「……それと同じで、自分は初めっから呪われていて、生きてるだけで誰かを不幸にしている、なんて思うと……結構、辛かったりする」

——独モノ白シロ。複雑に絡まった感情を解きほぐすような独り言。

「いいえ、それは間違いですよ、リデルさん。……“呪い”とか“祟り”なんてものは、現実を信じられなくなつた人達の妄想です。そんな紛い物なんて取るに足りません」

——否定ネガティブ。自身が見て聞いて知って下した力強い結論。

ただ感情を全面に押し出すアランにしては珍しく、心を飲み込んだ平坦な声色であつた。

それつきり特にやり取りもなく、目的地に辿り着こうとしていた。結局、最後まで二人は並ん

で歩いていた。

(……これでもう、おしまい)

リデルは心の中で呟いた。

村長の言ったことを飲み込み、アランの言うことを信じるなら、二人は合わない方が良いでしょう。会うこともないはずだ。狭イェル村だから、長く滞在するなら顔を合わせるかも知れないが。

何にせよ、アランはこの村から出ていく。それは決まっていることだ。

大男の癖に腰が低くて、顔立ちが良いくせに情けない奴で、何をしても無遠慮で、すぐに知ったような口を効く——不満を遠慮無く言えて、怒りを満遍なくぶつけることの出来る——そんな相手がいなくなる。

(……だから何だって言うのさ)

自分はこの余所者に、一体何を期待しているのか。あれだけ当たり散らしておいて、馬鹿みたいな話だと、少女は思う。

既に店の入り口へ差し掛かっていたが、こんな気分のまま別れを告げるのはどうにもバツが悪かった。仕方なしに、最後だと言い聞かせ、心を振り絞った。

“それがどうした”と、形の定まらない凝りに向けて叫び、取り留めのない話を振った。

「でもさ、この世界を支配している魔導ってのは、そっちに近いんじゃないの？」

顎を軽く上げて、挑発的な視線を浴びせる。その雰囲気を感じたアランも、応えるように、わざとらしく持論をひけらかした。

「チツチツ——甘いですねリデルさん。魔導は科学ですよ？ 個性は出ますが、同じ手法を使い、同じ奇跡を生み出すことが出来るなら、そこには法則が存在するんです。論理的な説明が付けられないのだとしたら、それは観測者の無自覚——我々の知識が足りないから見えていないだけで、体系という名の真実は、常にそこに在るんです」

舌打ちが苦手なのか出来ないのか——アランは言葉で表現していた。

そして理論的なのだと言わんばかりに、軽く銀縁眼鏡を持ち上げ、ニヤリとする。釣られてリデルも小さく笑う。

「……アンタさ、本当は何しに来たの？」

「私って本当に信用ないんですね…… 私は冗談は言いますが、嘘は付いていませんよ。目的は本当の本当に竜種です。私の専門は竜種の生態調査で、主に行動範囲の特定や特性能力の把握、人間社会への影響力の評価、資源価値の判定、それと分類分けなんかもお仕事の範疇ですね。要は竜種の専門家ってことです」

「竜種の専門家？」

リデルは聞きなれない単語を鸚鵡返しに答えていた。“専門家”という代名詞に、神妙な面持ちとなっていた。

「安心して下さい。先程もお伝えしましたが、私はこの村でこれ以上、変な探索をするつもりはありません。取り急ぎは、明日の早朝にこの村を出ますから」

人を安心させる笑顔だった。嘘はないのだと、きつぱりと告げることで、少女の不安を和らげようとしていた。

——明日、村を出ていく。

そんなアランの配慮をよそに、リデルはそのことに何故か不安を覚えていた。出ていくのは分かってはいたし、この一刻で何度“出ていけ”と思ったことか知れない。

にも関わらず、少女は自分でも意外な言葉を口にしていった。

「……御山に——セントレーニアに行くの？ 知らないと思うから、言っとくけど、あそこはアランダが考えている以上に危険だから。行くのは止めた方が良いでしょう」

言った後で、らしくもない警告をしてしまったと、リデルは僅かに顔を赤らめた。

村人にとって、余所者が何処から来て何処へ行くこうと関係ない。実際、リデルはこの村を通り過ぎていった者を幾人も見ているが、誰一人として顔も、名前すら思い出せなかった。

だから、これが本当に親切心から出たのであれば幾分かマシだった。それならば、何を言い返されても気まぐれなのだと言いつつ。だが本音が別のところにあつて、そのせいで引き留めたのだと悟られれば、相手に何を言われたものか知れない。

ふざけた答えでも、真剣な答えであつても、きつと腹が立つに決まっている。

——そう、不安の正体は隠さなければならぬのだ。

自分が知られてはならないと思つている事、そして知つて欲しいと望んでいる事の、そのどちらも。

ところが、知らず知らずのうちにリデルの心は傾いていた。知られてはならない方へ、一步踏み出すのを、止められなかった。

「今さ、専門家つて言つたでしょ？ ならば、相手の……“竜の声”は聞こえる？」

「……竜の声、ですか？ 鳴き声が聞こえるか、という意味じゃ……ないですよ？」

唯の鳴き声なら、誰が聞いても同じはずだ。あえて“聞こえる”と表現するには、何か意味があつてのことだろう。

アランが深々と考え始めた時だった。リデルは首を横に振つては、自分の言つたことを取り消そうとした。聞いたこと、それ自体が間違つているのだと言わんばかりだった。

ところが、強く頭を振り過ぎたせいで、頭を覆うように巻いていた布の留め具ヒシが一つ外れてしまった。先程、考え事をしていた際、無意識に触つて緩んでしまつていたので。

軽く解けた布の合間から、前髪が一房流れ落ちて、アランは驚いた。窮屈に収められていた少女《リデル》の髪は思いの外長く、そして真っ赤だった。

陽の光の当たり具合で、本当に燃えているように見えた。

“明るい赤毛”などという程度ではなく、赤毛が“赤茶けた色”に見える程の、燃え盛る炎のような緋色だった。アランは初めてリデルの瞳の色を見たとき、とても珍しいと思つたものだが、髪はそれ上回る色彩を誇つていた。

リデルは慌てて布を抑えつけて髪を隠した。そして手際よく留め具ヒシを直すと、髪と同じ緋色の瞳が、アランを仰ぎ見た。

「……見た？」

「何の事ですか？」

「………なら、いい」

そう、少女が結論付けた直後だった。

「それにしても、とても綺麗な色の髪だ。いやはや勿体無い。ついでにズボンなんて止めて下半身にしたら、きつと何処からどう見たって立派な貴婦人で——ぐわあはっ！」  
リデルは嘘付きと性的嫌がらせの仕返しに、豪快な突上打をお見舞いし、アランは見事に反っくり返って倒れた。

もつとも、少女の細腕が生み出す破壊力など知れている。更に言えば、両者には身長差もあつたので、大怪我をせずに済んでいた。

「あ、貴女って人は何でそんなに——」

尻餅を付いた姿勢で抗議をした時だった。殴られたのは別の衝撃が走り、思わず手で口を覆う。アランを黙らせたのは、暴力よりもつと強力な武器だった。

「アンタって奴は本当に……」

少女の瞳に溜まった雫が、今にも溢れんばかりだった。ふわりと零れ落ちる直前、リデルは袖で乱暴に拭き取り、アランをキッと睨み付けた。

その目に宿したのは怒りと、ほんの僅かばかりの寂しさ、だろうか？ それを確かめる間もなく、そのまま無言で走り去ってしまった。

「リデルさん……？」

思わぬ事態に、アランはしばし呆然とする。怒らせるだけならまだしも、まさか泣かせてしまうとは。

（——少々、やり過ぎましたかねえ？）

せつかく村長と少女の隠し事に繋がる手がかりを見出したというのに、これからの詮索は、闇雲に警戒心を煽るだけだろう。

計算違いも甚だしい結果に自省し、ばつが悪そうに頭をポリポリと掻いたところで、アランは別の事実にはッとする。

「リデルさん……村長さんの伝言はどうなるんですか？」

照り返しが厳しい初夏の午後、そう呟いたアランの顔は、馬鹿丸出しであった。

5

「陛下！ エスカーダ陛下！ 我が君よ、何処にいらっしやいますか!？」

女の大声が、緑豊かな庭園に響いた。感情が昂ぶっているのが手に取るように分かる声色だ。女は周囲に向けて幾度となく叫ぶが、応える者はおらず、聞こえて来るのは川のせせらぎだけだった。

（全く……あの御方はいつも雲のようにふらふらと！）

女は——クラムナート国の女官であるリュリュアローワンスは、胸の内で軽く毒づいていた。初夏の日差しを受けて深々と色付いた木々の美しさには目もくれず、リュリュはずかずかと大

またで川べりを歩いた。随分と男性的な歩き方であったが、見た目もそれに負けず劣らずといった感のある出で立ちだった。

その身に纏う内務役人用の制服は、女性用の足首まである長下半身衣ではなく、男物のズボンを履いていた。汗ばむ陽気も知らず、真っ白なシャツにシワひとつない上着を羽織る徹底ぶりである。

顎の辺りで、神経質なくらい綺麗に切り揃えた髪に始まり、全身の至る所に隈なく手入れがされていた装いは、その過度に几帳面な性格の表れだった。

リュリュは女性では背の高い部類に入る。振る舞いも含めて様になっているのだが、どこかステレオタイプ固定観念にある男性像を彷彿させる。娘盛りの年頃であったが、女性的な華やかさより男性の力強さへの傾倒ぶりが窺えた。

川のせせらぎに耳を傾ければ、少しは落ち着けそうなものだが、そんな暇もないのだと言わんばかりで、今も鷹のように目付きを鋭くして、辺りを見渡していた。

夏の日差しを受けて光を散らす川面に目を向けると、女官は眩しそうに目を細めた。

木々の間から覗く空は、憎たらしくなる程に雲一つない晴天であった。王宮の室内で執務に従事すれば、十分と経たずに汗ばんで来るというのに、庭園は水と風の流れがあり、比較のしようもなく涼しかった。

あまりの環境の違いに、聖人であっても不平の一つは言いたくなりそうなものだが、国の一女官に過ぎないリュリュは、自分の立場に不満を持ったことはなかった。

この庭園の所有者と自分の身分の違いを十二分にわきまえていたし、何より、今の役職に取り立て貰った恩に報いることしか考えていなかった。

ともすれば、怒声に聞こえかねない叫び声だったが、なんとということはない、自分の役割をこなそうと躍起になっているだけの話しであった。

「陛下！火急のご報告ゆえ、お返事頂きとう御座います！」

リュリュは更に力を込めて叫んだ。少々大声で叫び過ぎて、喉を枯らしかけた時だ、

「リュリュ。そんな大声を出しては、この子達が怯えてしまう。」

頭上から、そんな女官の振る舞いを厳しく嗜める声があった。

リュリュが振り向くと、そこには庭園の中でも一際大きな樫の木があった。声のする方を向くのだが、厚く重なる木々の葉に視界を遮られ、探し人の姿は見つからなかった。

慌てて木の幹の方へ立ち位置を変えると、見上げた先に、一人の女性がいた。

「エスカーダ陛下！ イェル村調査の件で、ご報告とご相談があります。こちらへ降りて来て頂けないでしょうか！」

「嫌。私は今、この子達と語らっているところなの。」

まさに即断即決、にべもなし。

「陛下」と呼ばれた女は枝に腰掛け、枝先へ視線を向けて微動だにしなかった。

「そこを何とかお願い致します！」

女王はリュリュに目もくれず、代わりに向けて手をプラプラさせる。

「話しはおしまい」の合図だった。まるで取り付く島もない。

ちなみに、“この子達”とは、枝先に巢を拵えてた鳥だ。二匹の親鳥が、生まれたての雛を守るように、外敵に向けて激しく威嚇を繰り返していた。その姿を、エスカーダは親が子を慈しむような表情をしながら見つめていたのだ。

（……語らうとは、もっとうちややかな雰囲気なのでは——いや、陛下のことだ、きっと私などには計り知れない何か深謀遠慮なお考えがあったのこと）

若干、個性的な感性を持っていた女官は、健気にも女王の趣味を何とか理解しようと試みた——が、エスカーダ本人以外の何者に理解出来るだろうか？ 出来るはずがなかった。

リユリユはさぞ無念そうに臍を嘔むと、恐縮しながらも懇願した。

「陛下、どうあっても聞き入れて貰えませんか！？」

「い・や・よ。私は今、忙しいの。……見なさいな、この親鳥の必死な抵抗を。」

私が、この手を伸ばして掴んでしまえば、居場所も生きる意義すら無くなってしまふ……

その絶対的な恐怖に抗っているのよ。この子達は何と叫んでいるのかしら？ “助けて”？ その

れとも“手を出したら承知しないぞ”……親の愛って素敵。想像しただけでゾクゾクするわ——

とてつもない嗜虐趣味を全開にして、女王は再三の要求を拒否した。そして、開けっぴろげに

落胆するリユリユを眺め、口元に綺麗な三日月を浮かべる。

その表情は、“女王”というより、もはや変態行為の“女王様”といった風情である。

気落ちした女官は、悲壮感を一層高めて、次第に目が虚ろになっていった。頭の中でグルグル

と渦巻く一つの決意が、見た目によらず細い、彼女の神経を苛んでいたのだ。

「……無念です。報告一つまともに成し遂げられないとは……。ですが、これも全て小官の

不徳の致すところ。このリユリユアローワンス、陛下の臣下として、死して汚名を濯ぐ所存に御

座います。……陛下、何卒、我が屍の言伝はお聞き入れ下さいませっ！」

おもむろに両膝を地面に着いたかと思えば、腰に忍ばせた短剣を取り出していった。

何やら不穏な気配を感じ取ったエスカーダが見下ろすと、そこには上着を脱ぎ捨てて、上半

身が下着一枚となった変態がいた。

もはや言葉にもならないが、一つだけ確実に言えることがある。それは、この女官は女王を

超える逸材である、という一点に尽きるだろう。

「ぶへっ！ そなた、何をしているのっ！」

女王の珍妙な声にもリユリユは耳を貸さず、現実から目を逸らすように力一杯瞼を閉じ、短

剣の刃先を腹に当てていた。チクリと刺さる痛みに負けそうになったが、怯まず一ミリ単位でゆ

っくりと押し込んでいった。

最も苦しむやり方で自殺しようとしたリユリユであったが、正面からトン、と軽い音がしたのを

聞いて手を止めていた。

眼前には、猫のように華麗な着地を決めた女性がいた。

リユリユよりも幾つか年下に見えたこの女性こそ、クラムナートの統治者たる女王エスカーダ——

シロンIIクラムナートその人だった。

リヴェールというゆったりとしたクラムナート伝統のスボンに、珊瑚色の軽靴、麻の半袖服と

いった庶民風の地味な格好だった。服装はありきたりであった。しかしながら、それを纏う者は、

この世界で唯一無二といって良いだろう。

肩口で緩やかに巻かれた白金髪や、プラチナブロンド 深刺とした蒼穹を思わせる双眸は、それだけで宝石に等しい価値を持つてた。

確かに、美しいだけなら世界にごまんというが、彼女の真価は一つ一つの振る舞いにあるだろう。エスカーダの立ち姿は気品に溢れていて、歩く様は優雅であり、何気ない仕草は美しかった。リュリユが男性的な鋭さなのだとしたら、エスカーダは女性的な柔らかさの極みだ。口振りだけとは言え、木の上のいた嗜虐嗜好者サディストと同一人物とは、誰も想像が付かないだろう。

「……リュリユアローワンス。そなた、私の庭園を血で汚す気？」

睥睨するエスカーダを、リュリユはまるで神を崇めるような視線で見つめた。

しかし、この女王は、女官の手を差し出す動作すら流れるように華麗であり、その美しい容姿も重なれば、神と崇めたくなる気持ちも分らないでもない。

「陛下……うう」

リュリユは一言呟くと、自身を抱きしめ、泣き出してしまった。半裸状態ストリンの羞恥心は何処かへ置きっぱなしにしたまま、嗚咽を漏らしていた。

「……何でまたこんな事を？」

「そ、それは……あの男が、そう言っていたのです……古来より、クラムナートでは、ぶ、文官が責任を取る時は、腹を切るものだと……」

話を聞けば、泣き声を混じらせてながらも蘊蓄うんちくが溢れ出た。

つらつらと事細かに記憶しているのは、彼女なりに真剣に学ぼうとした成果だろう。応用すべき状況から形式、手順まで非の打ち所のない完璧なものだった。

よくぞ調べたものだと、エスカーダは感心してしまう。教師の熱弁を振るう様が、まざまざと見えるようだった。

「私は、私なりに責任を取るつもりで――」

「お・馬・鹿・さ・ん」

ひとしきり話を聞いたところで、エスカーダの下した結論はその一言に集約された。

「リュリユ……リュリユアローワンス。そなた――というか、あの者の知識は何も間違っていないわ。私が持ちうるものと比較しても齟齬そごは見当たらない。決定的な一点を除けばね――」  
「……………」

「そなたは先刻、“古来より”と言ったが、そんな慣習、今のクラムナートに存在しないの。腹を切っていたのは、二百年も前のお話し」

リュリユは茫然自失となった。ポカンと開いた口から、にゆるりと魂が抜けていきそうな勢いである。

胸を隠していた両手も力無く下がり、ささやかな双丘そうきゅうを惜しみなく披露すると、蒼穹そうきゅうを思わせるエスカーダの瞳が、冷ややかに細められる。

「おつちよこちよい。生真面目も良いけど、何事も自分の頭で判断して初めて価値を持つものだと知りなさい」

エスカーダは無防備になっていた肉体を、冷厳とした口調で斬り付けた。

緩やかに現実を受け止めようとしていた女官だったが、神の如く崇め奉る相手から雷光に等しい叱責を浴びせられると、

「な、な、な、なんですとおおしくしく？！！！！！！！！！！」

叫んだ。力の限りに叫び声を上げた。最早、絶叫だった。エスカーダの鼓膜を破りそうな音量は、目に見えない凶器だった。

大逆罪に問われてもおおしくない女官の振る舞いに、支配者は秀麗な顔立ち崩さず、透明な笑顔を浮かべた。

ただし、あまりにも透明過ぎて、心の中の殺意が透けて見えてしまうような、凜然とした笑みであったが。

「でですが、この話しを同僚の者にしたとき、何も言われませんでしたぞ！だだだから、疑い一つも信じたというのに……」

「皆、腹の中で笑ってたのよ。“まさか本気で考えている訳があるまい”とね」

エスカーダは無機質な完全無欠笑顔で、慌てふためく子羊を背後から射った。

リュリュはドスンと心臓を撃ち抜かれ、死に体となった。

「そなた、存外に人望がないのね」

死体に鞭を打つ、とはこういう事を言うのだろう。汗ばむ季節だというのに、リュリュは唇まで真っ青にして戦慄いた。

エスカーダは決して乱暴な言葉遣いをしていない。権力を笠に着た言い方をしている訳でもない。にも関わらず、聞き手に“そうです”と思込ませる不思議な力があつた。

「陛下、もうその辺りでよろしいのでは？」

最後の一押しをくれてやろうというそのとき、横槍が入った。その低い声を耳にした瞬間、エスカーダの涼しげな表情が僅かに陰る。

「……一体何の事か？ さっぱり分からぬな」

「私は、臣下を無為にいたぶるのは止めて頂きたいと申し上げているのです、陛下」  
檜の木影から現れたのは、クラムナート国の宰相であるジョゼフ＝ステイルだった。

どんな時も冷静沈着である人となりから、『鋼鉄』の異名で知られる傑物である。

ジョゼフが五十才を超えて初めて高級官僚となった年の事だ。数ある官僚の中からエスカーダはジョゼフを宰相に任じた。名の通った人物達を差し置いての人事は異例中の異例であつたが、その知らせを受ける時でさえ、伝言係を待たせて、事務作業を優先して処理したという。

“辞令は既に決まっていることであり、逃げはしない。だが私の手元にあつた仕事は、どうするか決まっていないことである。どちらを優先させるべきか、自明の理である”

宰相となつた後、その当時を振り返ってジョゼフが言ったその台詞は、あまりにも有名であり、彼の人となりを明瞭に現していた。

「相も変わらずお固いな、宰相閣下は」

興が削がれた様子の女王は、無駄のない優雅な動きで踵を返し、その場を立ち去ろうとするが、

「お待ち下さい、閣下」

鋼鉄ジョゼフの男に呼び止められると、ピタリと足を止めていた。自由気儘を通せる権力を持ち、またその気質を持ち合わせた人物とは思えない制動ブレーキの効きようだった。

「アローワンスは、陛下のお耳に入れておきたい事があるようです。どうかお聞き入れ下さい」  
エスカーダは「仕方ない」とぼやき、舞うように回れ右をする。

「……どうしたアローワンス、早くお伝えしろ。陛下は見た目や振る舞い程、暇な御身分ではないぞ」

「は、はい！ 宰相閣下殿、申し訳ありません!!」

リュリュは敬礼した所で、自分が半裸であることを思い出していた。思わず隠そうとしたが、一国の最高権力者達を待たせる訳にもいかず板挟ジレンマみに陥った。

しかし、二人とも半裸の人間など見えていないように平然としていた為、結局、当初の目的を果たすべく口を開いた。

「先刻、イエル村の調査の定期連絡入った次第です。書簡の概要ですが、「特に異常なし」との事。追って第一目標であるセントレーニア山の調査に入るようです。……そ、それと、あの男から陛下に折り入って懇願したい旨が記述されて」

「……それで？」

「そ、それが封がしてあります」

リュリュが差し出した手紙の表には「親愛なる陛下へ」とあり、紅い蠟で封印された裏面には、「中は最高機密文書シークレットドキュメントです。リュリュさん開けたら駄目ですよ」と、名指しで記されていた。送り主のサインは唯、『Aより』フロム・エーとしかなかった。

「それで、そなたはあの者の言う事を律儀に守っていた訳か」

恐縮するリュリュをよそに、エスカーダは封を破り中身を確認する。すると、中には手紙が一枚、手紙には一行添えてあるだけだった。

エスカーダは一瞥しただけで手紙をリュリュに渡し、リュリュは手にした手紙を読むと、信じられないものを見てしまったように、何度も目で追った。だが、幾度読んだところで内容が変わるはずもなく、

「な、何ですかこれは？」

「133ルビー貸して下さい。なお、この事はリュリュさんにはご内密に」

聞かれたエスカーダは肩をすくめた。

内容は最高機密文書シークレットドキュメントというより、借金依頼書ローンリクエストである。しかも中途半端でやけに具体的な金額の指示であった。当然のことながら、国家元首に依頼するような類のものではない。

咄嗟に理解出来なかったとしても、それはリュリュのせいではないだろう。

例えばこれが本当に機密文章で、文字の配列や形状、用紙の種類等で高度に暗号化されていたり、魔導によって正しく読めないよう封印されているならば、疑いの余地はない。

変な話し、炙り出しで構わないから、何か補足説明なり理由なり書かれていれば、リュリュはまだ納得出来たかも知れない。

「何故だ——」

「……リュリュアローワンス。そなたには同情を禁じ得ない。だが、あの男が世界で類を見ない

アホであることなど最初から分かっていたはずよ。そなたも、それを承知の上で拝命したのでしょ。今更——」

「——何故、私には内密なのだ！アランⅡエクスブルおおラああく!!」  
「そこっ!？」

エスカーダは思わず突っ込んだ。

女官——つまりは女性の官吏であるリュリュは、武官を凌ぐ氣勢を上げた。体に残された僅かばかりの魂を烈火の如く燃やし、轟々と唸る憤怒を撒き散らした。

ついでに、手にしていたアランの手紙をビリビリに破り、空に撒き散らした。

欠片は、そよ風に乗って舞っていく。

エスカーダは啞然と、ジョゼフは黙然としてその様を見届けた。二人とも“ゴミがどうだ”とか、些細な事を注意する気もさらさら無くしており、しばし空虚な時が流れるままとなった。

「……要件は済んだか、リュリュⅡアローワンスよ」

ジョゼフは、真っ白に燃え尽きて灰と化した女官に問い掛けた。

リュリュは“はい”としか応えられなかった。実際問題、手紙を破って無かったことにするなど不可能だが、三人とも暗黙の内に、それを是としていた。

「ならば職務に——」

ジョゼフの指示を待たず、リュリュは幽鬼のような足取りで踵を返していた。身に付けていた白いシャツと、折り畳んで皺しわの付いた上着をそのままに。

人の話を聞かない女官は、最後の最後まで人の話を聞かずに去って行った。そんなリュリュの背中に、“せめて服を着ていけ”とは、誰も言わなかった。

「……さて、よく分からないけど、これで良かった——かな？」

エスカーダは両手を組み、空に向けて伸びをした。両手をそのまま頭の上に乗せると、舞踏家ダンサーの如く右足を正面に九十度上げ、体を前に出した。その時だ、

「お待ち下さい陛下」

ジョゼフが再び呼び止めたとき、エスカーダの重心は前に出ていたにも関わらず、上体を後ろに置き去りにしたまま動きを止めていた。

丁度、後ろ髪を引かれたような姿勢を保持《キープ》しつつ、エスカーダは首だけを器用に回した。

「まだ何かあるの？」

普通の人間なら、その姿勢でいるだけでも辛そうなものだが、そのまま話し掛けるとい曲芸をやったのけた。

「彼が、私宛に送った書簡の件です」

エスカーダは腹筋で重心を中央に戻し、水平に保った右足をそのままジョゼフへ向けた。

強靱な脚と、優れた平衡感覚の成せる所作は、無名だが『技』と呼ぶに相応しい。まるで要件を尋ねているような無言劇バントマイムだった。

「例の疑惑——竜種資源アルマナの不自然な流通に関して、仮説の目処が付いたようです」  
エスカーダは更に股関節だけを曲げ、じわりと右足を上げて見せた。

丁度、剣の切っ先を突き付けるように、つま先から太腿まで一本の線となった右足が、宰相の喉元に向けられた。

「王手詰めは近い、ということかしら？」

「ジョゼフは深く頷いた。」

「流石は有資格者の中で、唯一の順位外といったところか……それにしてもあの男、相当な苦勞人だな。あちらこちらの顔を立てなくてはならないとは、不自由なものだ」

「……左様でございますな」

つま先は喉元から外されると、天に向かって伸びた。やがて右足が体幹と一体になり、I字となつたところで、流石のエスカーダも顔をしかめる。

エスカーダは無理に体勢を維持せず、ふつ、と息を吐き出して全身の力を抜く。全身を僅かに屈め、振り下ろされた右足の勢いを完全に相殺した。

悠然と上体を起こした時には、相当強張っていたであろう筋肉が、常態に戻っていた。

女王と名が驚く程、強く靱やかな身体の持ち主であった。

ジョゼフに真つ直ぐ向き直つたところで、今度は女王の方から質問が繰り出された。

「それで、あの男の方から何か要求はあつた？」

「はい。この手紙を書いてから一週間後、催し物を開くので是非とも参加して欲しいと」

「ほう？ それはさぞ盛大になると期待して良いのだろうか……準備にはどのくらい掛かる？」

「既に整えております」

“鋼鉄”と呼ばれる男に、一分の隙もありはしなかった。淀みのない答えに、エスカーダは力強く笑う。見る者の士気を鼓舞させる笑みだった。

「よろしい。では第一中隊長に伝えよ、“旅を楽しめ”とな。ゆっくりと進んでイェル村までは五日の工程だ」

アランの手紙が現地から届くのには、早馬で二日日を要する距離だった。時間差を加味するとアランの要求は無理も余分もなく、適度な緊張感で望むには最適だった。

「全てあの男の手の上というのは面白くないだろうが、この際、致し方あるまい。現地では奴の指揮下に入り目標達成に精励せよ」

「……御意に」

ジョゼフはおもむろに頭を垂れた。しかし――

「ジョゼフ……：クラムナート国宰相、ジョゼフ＝ステイル。私は腹の探り合いはあまり好きではないの。何か思うところがあるなら、今のうちに言いなさい」

エスカーダは僅かな変化も見逃しはしなかった。ジョゼフの肅然とした表情からは決して読み取れない心を、声色や、仕草や、気配などの機微から映し見たのだ。

エスカーダはジョゼフが何か言いたいのだと断定していた。

それは“直感”と呼ばれる抽象的な感覚から導かれた可能性を示したのではなく、相手を見聞きした事実として結論付ける理性的な観察力の賜物であり、普段から他者の事を良く見ていなければ、到底成し得ない技能である。

大した炯眼の持ち主であると言わざるを得なかった。エスカーダがこの若さで女王となり得たのは、血統に依るものだけではないという証明だった。

「恐縮にございます。それでは一つだけお伺いしてもよろしいでしょうか？」

——同じ事は二度言わない。エスカーダは黙すことでそれを雄弁に物語った。

“命令に対してではない”と断りをいれ、ジョゼフは意外な疑問をぶつけた。

「常々、疑問に感じておりました。何故、あのような者を大任に付けさせておられるのでしょうか？」

「ジョゼフはあくまで真剣だった。シリアス エスカーダは二重の意味で苦笑した。冗談にしろ、真剣にしろ、この文脈からは溜め息混じりの笑いしか出てこないのだ。エスカーダは堪らず聞き返した。ジョーク

「……“あのような者”とは、あの男——アラン——エクスプローラの事か？」

「(冗談を)」

ジョゼフはあくまで真剣だった。シリアス

そもそも、鋼鉄は硬さが信条である。“お固い”と評されようと何だろと、冗談には縁の無いのである。ジョーク

「私が申し上げているのは、リュリュアローワンスの方でございます」

ニコリともせずそう断言すると、エスカーダは大層つまらなそうにした。期待通りでつまらないのだ。

「エクスプローラ殿のかを鑑みれば、もつと別の優秀な人材を——さもなければ、手足となる者を何十人か充てがっても良いのではないか——そう考えておりました」

(——が、面白い。面白味には些か欠けるが悪くない。まともに話したことも無いくせに、あの男の報告書から想像力を働かせるとはね)レポート ユーモア いきさき

エスカーダは内心でジョゼフの能力を高く評価したが、表に出すような真似はしなかった。

「クラムナート国の宰相閣下は分かっているのか、それでも人を見る目が霞んでしまつたのか……この国を治める者としては前者だと信じたいのだがな」

それどころか、疑って掛かってみせた。蒼穹を思わせるエスカーダの瞳はどこまでも深く、容易く真意を覆い隠してしまう。

「リュリュを奴の担当に据えている理由はとても単純……彼女は“首輪”だ。奴をこの国に縛り付ける為のね。もつと本質的に言えば——」シンプル

一呼吸を置き、エスカーダは衝撃的な言葉を口にする。

「誰も付いていけないから。……この国の人材では、奴に並び立つ者はいない。無論、奴を超える者もない。誰も奴を御し得ない。この国の王である私でさえ、あの男を自由にすることは叶わない。だからこそ、それが出来てしまうリュリュには価値がある」エスカーダ シロン クラムナート

“誰の束縛も受ける必要がない人間”がこの世いると仮定した場合、その人物が他者の命を聞くのだとしたら、それはどういった場合か——

ジョゼフはあくまでも可能性として、一つの答えを示した。

「エクスプローラ殿は、彼女に何か特別な感情を？」

「さて、そこまでは分からない。あの男、肝心なことはほとんど話さないから……私としては、

そうではないのだと思いたいが、仮にそうだとしたら、リュリュは強力な好敵手ライバルということになるのか」

「……好敵手ライバル、でございませうか？」

ジョゼフは女王が口にしたことの無い単語を耳にして訝しがった。

“この国で並び立つ者がいない”という意味では、名実共々、そう呼ばれるに相応しい人物であったのである。それが謙虚に、対等であることを暗にほめかしているのだが――

「――所謂いわゆる一つの、恋敵ライバルというやつだ」

鋼鉄の異名を持つ男でも、流石にこの時ばかりは驚いた。リュリュのように大声を真似はしなかつたが、目を僅かに目を見開き、彼なりの驚嘆を表して見せた。

ジョゼフは、自分が“男女の仲”というものに精通しているなど、口が裂けても言えなかつたが、人並みには理解しているつもりだった。

しかしながら、エスカダーの口から彼に対する親愛の念を感じさせる場面があつただろうか。思い浮かべても、記憶に留めるものがなかつた。

「意外か？」

「初耳な故……私めの無知をお許し下さい」

意外どころの話ではなかつたが、ジョゼフは慇懃に謝罪した。

「構わん。私も、口外にしたのは初めてだ」

「……恐れ多いことにございます」

「何故かは私にも良く解ない。気付けばそうだった。まあ、色々不都合はあるが、悪い気はしない」

（……不都合？）

だが僅かに遅れ、ジョゼフは理解を灯した。人は身分が違えば考えも相応に異なる。それは当然である。一国の王ともなれば、個人の価値観ではなく、“政治”が優先されるものだ。一人の人間に内なる好意を寄せるにも、憚はばかるものがあるということだろう。

ジョゼフが、月並みの幸せを求める一人の女性を不憫に思つた瞬間、

「あやつを、どうしようもなくいたぶりたくなる」

ジョゼフの幻想ファンタジーを、女王様は一切切切ぶち壊した。

妖艶な笑みに平坦な口調の組み合わせ組み合わせというやつは、実に恐ろしかった。心胆寒からしめるとは、こういうことを言うのだろうか。

ところが、本人は口にしたことで多少の昂揚を覚えているらしく、白い頬を僅かに赤らめる辺りは、嬉し恥ずかし嗜虐趣味サディズムというものなのか――その感性は、当人以外に理解出来る代物ではなかつた。

（アローワンスといい、陛下といい、彼は個性的な人物から好かれる傾向にあるようだな……）心地良い風の流れる先を見つめ、鋼鉄の男ジョゼフはふと思ふ。

アラン・エクスプローラという人物、実に様々ながらみに縛られる苦勞人なのではないか、と。他人の語る人物像と、報告書レポートから想像出来る人物像とは、唯一それだけが読み取れる事実であるように思えた。

